

---

# 君色

小狼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君色

### 【コード】

N8603N

### 【作者名】

小狼

### 【あらすじ】

一人の女子高生が悲しい恋を経験して成長するお話です

## 始まり（前書き）

作者の体験談を少し含めてみました。

少しでも共感して頂けたらと思います。

始まり

入学式。

私は期待で胸を膨らませながら今日から通う高校へ向かった。

眠くなる様な校長先生の話聞き

これから何度も歌う校歌を先輩達が歌い

何事もなく入学式は終わった。

まだ体に合っていない制服

くたくたになっていた中学校の制服とは全く違っていた。

「これから…ここに通うんだ」

校舎を見渡す

同じ中学校出身の人がいなくて全員知らない人。

友達が出来るかなどの不安でいっぱいだった。

家に帰ってベッドに倒れたまま眠ってしまった。

入学式から1ヶ月。

今までと全く違う環境に慣れるだけでいっぱいだった。  
でも友達ができた。

「みさー！！」

「ナミちゃん！！」

ナミちゃんは席が近くて、私が勇気を出してしゃべりかけたら明るく対応してくれて

コロコロと表情が変わって楽しくて

親友と呼べる仲まできた。

「みさ？」

「えっ？あっ！ごめん。」

「みさはいつもボーっとしてるな！」

ニヤハハと笑いながら言う。

そんな他愛のない話をしてた。

ふと

部活動をしている先輩達が見えた。

ナミちゃんはそれを見つけ、駆け寄った。

「お。やっぱりバスケやってるのってカッコイイよな！」

「うん！ドリブルうまい人いると、ついつい見入っちゃうよね。」

「それわかる！たとえ敵でも誉めちゃつよなあ」

「ナミちゃんはさー」

「ん？」

「部活…何に入るか決めた？」

「んー…。」

ナミちゃんに聞いてから自分も何に入ろうか迷った。

「そっちなあ」

私はナミちゃんは運動部に入りそっちなあと思っていた。

運動神経が良くて、本人も体を動かすのが気持ち良いつて言ってたから陸上部やバスケット部、バレー部もいいんじゃないかと勝手に思っ



ていたら

「私は弓道部に入る！」

意外な答えだった。

「えっ!?!」

なんで?と聞く前に話してくれた。

「バスケとかバレエとかは授業とかでも出来るし、大人になってやるうと思えばいつだってできるじゃん?」

「うん…」

ナミちゃんが言いたい事はなんとなくわかった。

「でもさ…弓道なんて今しかできない気がするんだよね。大人になつて『さあやるぞ』と思つて出来るものじゃなさそうだし」

「そっか…」

少し考えたけど、その観点から見ってしまったら

弓道部しかないと思えてしまう。

「じゃあ…一緒に入ろう!!」

「がんばるぞね!!」

こうして

私達は弓道部に入る事にした。

藤 恭一

弓道部に入部届けを出す為に親のサインをもらった。

お母さんは私が弓道部に入る事に反対した。

ナミちゃんが言っていた言葉をお母さんにも伝えた。

そしたら渋々と承諾してくれた。

私は部屋に戻ってベッドに倒れこんだ。

ナミちゃんはすごい

行動力があって、それを実行する勇気や考えがしっかりある。

私は……

「なんの取り柄もないや」

つぶやいたと同時に、すつと涙がでた。

ナミちゃんといるとコンプレックスを抱く。

「……私って嫌な奴。」

そのまま眠ってしまった。

弓道部の先輩達は優しくナミちゃんが明るく楽しく話をしているのでいつも笑いが絶えない部活となった。

先輩達は2年と3年を含めて男子3人、女子は5人。

私達の代は男子1人、女子は私とナミちゃんを含めて4人。

「1 - B 藤恭一です。」

自己紹介では必要最低限の事しか話さなかった。

自己紹介が終わったあとにナミちゃんが話かけていた。

部活が終わってナミちゃんと一緒に帰ってる時に藤くんと何を話していたか聞いてみた。

「んー…、なんか…藤くんて自分から積極的に話に参加しないからな…」

「確かにしないね。ぼーっとしているイメージが強いかも。」  
笑いながら言った。

「だから…話とか苦手なら自分が話かければ少しは慣れるかなって  
思ってたさ」

「まあ…」

「ん？」

「藤くんにしたら余計なお節介かもしれないけどねっ」

タハハと笑いながらナミちゃんは頭を掻く。

「これからいっぱい藤くんとお話しているんな事知ったりしたいね  
！」

藤くんと仲良く友達をやっつけていきたいと思った。

自分の本当の気持ちを知るまでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8603n/>

---

君色

2011年10月4日16時34分発行